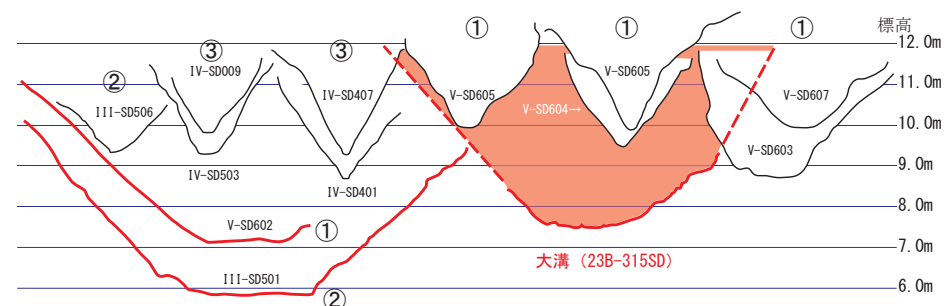


戦国期の「薬研堀」と「大溝」



周辺の調査地点と戦国期の溝の断面形状・深さ
(文献 - 『名古屋城三の丸遺跡』報告書 III・IV・V)

戦国期^{なごや}名古屋城との関連が注目される16世紀の遺構は、これまでの名古屋城三の丸遺跡調査の各地点で確認されています。

このうち大溝(315SD)とほぼ同様の規模をもつ遺構は①②で見つかっています。①地点東部(1993年調査写真)では南北方向の、西に150mほど離れた②地点では逆L字形に屈曲する溝があり、こちらは北側から埋められました。これらが一連のものと仮定すれば、当時の中心域を囲む施設の南限とみることできます。

さて、315SDは一定期間存続し、また改変もあったようです。下層には複数の粘土層の堆積があり、その後人為的に底が少し埋められた時期があったことなどが確認できました。

【用語】

やげんぼり 薬研堀：堀の底部がV字形をしたもの。底部の通行が困難になっているもの。薬研のくぼみの形に似ていることからこの名称が使用されている。空堀に多く使用される。

はこぼり 箱堀：堀の底部が平坦な逆台形をしたもの。水堀に多く使われる。

江戸時代 武家屋敷の井戸出土遺物

大型の掘り方をもつ3基が並ぶ井戸のうちの一つ、301SEは井戸側が漆喰で造られていたようです。使われなくなった井戸には大量の瓦や花崗岩石材とともに陶磁器類も捨てられました。織部写の鉢や馬の目皿、使われて擦り減ったすり鉢や鉄釉火鉢など19世紀を中心とした資料があります。



織部写 鉢



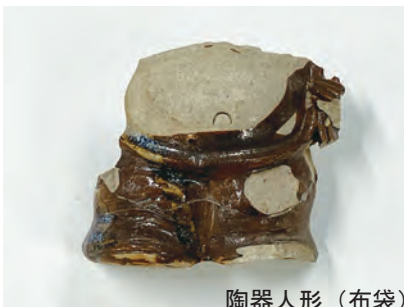
馬の目皿



焼塩壺 (17世紀)



土師質皿 (手づくね, 17世紀)



陶器人形 (布袋)

井戸として掘り進められたものの、湧水層まで到達しなかった土坑もあります。ゴミ穴に利用されたようで、サザエやハマグリ、アサリの貝殻や鳥の骨などが分解されずに残っていました。当時の食材を知る手掛かりとなります。

名古屋城三の丸遺跡 地元説明会 (R5 その2)

令和6年3月9日(土) 午前 11:00~



名古屋城三の丸遺跡は、名古屋台地の北西隅に築かれた名古屋城の南辺、上級武家屋敷が配置された範囲にあたります。これまでに20を超える地点で発掘調査が行われ、旧石器時代以来の人々の生活の痕跡が見つかっています。今回の調査は名古屋第4地方合同庁舎整備等事業に伴

うもので、旧郵貯センターの範囲を調査しています。8月まで調査を行っていたA区では、尾張藩上級武家の屋敷地の庭園関連遺構や戦国時代の屋敷地を区画する溝などが確認できました。B区の調査期間は令和6年1月～3月、調査面積は3,344㎡です。



公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24
<http://www.maibun.com>

調査支援



〒581-0034 大阪府八尾市弓削南3-20-2
<https://shimadagumi.co.jp>

B区は建物基礎を取り除いた面、地表から約4m下からの調査です。
そのため、検出されている遺構は当時の地表から特段に深く掘り込まれたもののみとなります。
調査では、東西方向に延びる戦国期の大溝（315SD）と武家屋敷に設けられた江戸時代の井戸が確認されました。

大溝（315SD）

A区の調査成果との検討から、この東西方向の大溝の規模は長さ103m以上、深さは4.5m、上端の推定幅は約12mとなります。

大溝は北側から埋められていて、北側に沿って大きな土塁が築かれていたと推定されます。この溝全体が丁寧にしかも短期間に埋められていることから、江戸時代初期の名古屋城築城と武家屋敷整備の際に埋められたと考えられます。

315SDは戦国期の屋敷地区画をなす「薬研堀」の溝とは規模も形状も異なります。今回の調査範囲での新旧関係でも、それまでの屋敷地を壊して新たに造られていることを確認しました。



← 1993年の旧名古屋営林支局地点（裏面の①）の調査時に確認された南北方向の大溝（SD602）の断面
西側（写真左手側）から埋められている
（1995、『名古屋城三の丸遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第60集）



大溝（315SD）の断面（東から撮影）



大溝の埋まりかた

